

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990500050		
法人名	社会福祉法人 緑風会		
事業所名	指定認知症対応型共同生活介護事業所 いずみの里		
所在地	栃木県 鹿沼市泉町 2396-3	電話:	0289-77-8177
自己評価作成日	平成30年9月 1日	評価結果市町村受理日	平成30年11月27日

※事業所の基本情報は

基本情報	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	ナルク栃木福祉調査センター		
所在地	栃木県 宇都宮市 大和 2-12-27 小牧ビル3F		
訪問調査日	平成30年10月25日	評価確定(合意)日	平成30年11月19日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域の方々にご利用しやすく、入りやすい「開かれた施設」を目指しています。地域の老人会や小中高等学校、学童保育といった方々の受入れを積極的に行ない、他事業所(宅老所、同様な事業所)との情報交換や交流を出来るだけ多く行なえる様努めています。ターミナルケア加算は取得していませんが、当施設内にてターミナルケアが行なえる様努めています。平成29年度～退職した職員は0名です。

【(外部評価で確認した事業所の優れている点、(評価機関記入)】

平成20年に小規模多機能と併設で開設した1ユニットの事業所です。法人グループ共通の想いとして「気づく」と「築く」をテーマにして、利用者の想いに気づくために、個別情報シートの記入内容の充実を図り、情報共有を通して利用者本位の支援に努めている。長年継続している地域交流会などの取り組みで地域との交流が一層深まり、最近では歌謡ショーなど地元ボランティアの来所、近所の宅老所の利用者が将棋を指しに毎週訪れるなど、利用者の楽しみも増えている。更に、緊急連絡網(13ヶ所)の中に自治会長などが登録され、防災面での近所の協力体制も整っている。運営推進会議は併設と合同で定期開催され、事業所からの報告の後、活発な意見交換が行われ、双方向の会議となっており、委員会後の避難訓練には委員3名の参加協力も得られている。加算は取得していないが、主治医、家族と連携のもと、最期まで負担の少ない快適な生活が送れるよう看取りケアに努めており、前年度は2名の看取りを行っている。併設事業所、北包括支援センターとの協同でさらなる地域福祉への貢献が期待される事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎年1回(4月)職員が集まり、今年度の目標を作成。「気づき」「築き」を実践の要として、職員同士で情報共有に努めている。	昨年理念の見直しを行い、「気づく」支援を通して信頼を「築く」を新たなテーマにしている。認知症の介護は「気づき」の連続でこそ成り立つとの考えが、全職員に浸透しつつある。1日3回(日勤→準夜→夜勤)の申し送りは、新たな「気づき」や変化を中心に行われており、情報共有を図りながら本人本位の支援を目指すことで実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	自治会に加入している。地域の行事への参加、小中高生の体験学習の受入れ、地域老人会との交流を持っている。	散歩中には挨拶を交わしたり季節の花の差し入れがあるなど、近所とは日常的にも交流している。長年続けている事業所主催の地域交流会が定着し、最近では歌謡ショーやクラリネット演奏など地元ボランティアの来所、近所の宅老所の利用者が将棋を指しに毎週訪れるなど、利用者の楽しみも増えている。更に、9月に実施した開所10周年記念行事には近隣住民など約80名の参加が得られている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	今年9月に開催される「ラン伴」という認知症に関するマラソン大会の「中継地点」として場所を提供する予定。年に4回の季刊誌を発行。ホームページを新しくし、理解を深められるよう努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回会議を開く。委員の方々から出る企画(歌のボランティア、オカリナ演奏ボランティア等)を実現出来るよう努めている。	家族代表(2名)、地域代表(2名)、市職員、法人役員(2名)が出席し、併設事業所と合同で定期開催されている。事業所からの活動状況や事故報告などの後、質疑応答があり、委員からは地域情報の提供や催事の際の衛生管理などについて注意喚起があるなど双方向の会議になっている。委員会終了後の避難訓練に3委員が参加している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	介護保険課の職員が運営推進会議に参加し、状況報告を行なっている。地域包括支援センターとも連携を密にとり、介護が必要な方々に円滑に介護サービス等の情報を提供できるよう努めている。	市職員が運営推進会議に毎回出席しており、事業所の状況や課題の共有が図られている。また事故報告や変更申請などで市へ出向いた際は関係部署にも顔を出し、情報交換や協力関係を築くよう努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関する内部研修を行ない、周知徹底を図る。昨年「虐待、身体拘束防止委員会」を発足。3か月に1回会議を開く。	離脱事故が発生しているが、見守りの徹底とドアセンサーの設置などで施錠せずに対応している。「虐待、身体拘束防止委員会」を発足させ、指針を作成すると共に3か月に1回委員会を開いている。運営推進会議でも指針の説明をしている。8月には内部研修を行い徹底を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と同様に虐待に関する内部研修を開き、周知徹底を図る。日々の心身状況の変化を見落とさず、発見時は速やかに報告出来るよう対策を講じている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人に関する相談はあるが、対象となったご利用者はおらず。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	ご利用者、ご家族に担当職員が説明をし、同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	来所時には必ず会話を持つよう努める。電話での連絡や相談を密に行なっている。	訪問時や運営推進会議をはじめとして、家族と話す機会に意見が多く得られ、多くの反映事例がある。全職員の顔写真の一覧表掲示の復活や、かかりつけ医受診前の更衣など家族の意見を反映させている。家族訪問時には事故の事後経過報告や電話での報告事項の再確認など、家族が不安に思っているであろう事への対応を重点に行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員の意見や提案は現場責任者の介護主任経由にてセンター長に伝わる仕組みになっている。	管理者は現場に入り直接職員の声を聴く機会も多く、現場主任に確認しながら迅速な対応に努めている。各種行事関係の企画運営や「気づき」に伴う個別ケアへの対応などは主として職員の提案を反映して実施されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回の人事考課を行ない、一人ひとりの職員が目標、反省を自己評価し、上司と面接を行なう。処遇改善交付金適用。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人による研修や、事業所内での内部研修を行なっている。法人外の研修にも参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	近隣の宅老所や小規模多機能型ホームとの交流を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人、ご家族から情報を頂き、どのような生活を送りたいのか等の意向を聞かせて頂いている。入居後も随時確認している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	同上		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	申請書欄に書かれている内容と現在の状況を確認し、当施設にて受入れが困難な場合は、他事業所への紹介、情報提供等を行なっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご利用者個々の力と馴染みの分野を見極めつつ、出来る事を行なって頂けるよう支援している。職員は、感謝の言葉を忘れず、共に支え合う関係を築く努力をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	外泊、外出、面会は時間の制限なく自由に出来る様にしている。また、面会時には必ず職員側から話しかけ、ご利用者の最近の様子を伝え、共にご本人を支えあっているようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	長年関わった地域の運動会やお祭りに参加。お祭り、運動会、お墓参り、美術展等に行き、馴染みの人や場所との関係の継続出来る様努めた。	自治会の役員などで長年関わってきた地域の運動会や御成町夏祭りなどの催しへ招待を受けて見物に出かける事は、知人友人と出会う機会にもなっており大切に支援している。また、絵の好きな利用者で昔通った近くの市立川上澄生美術館に個別支援で行き、思い出を楽しむケースなどもある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ご利用者同士の関係を考慮しながら、居場所を作り、歌や昔話を楽しんだり、家事を行ないながら、教えあったり、聞きあったり、孤立することなく過ごされている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	申請中の事業所に相談したり、事業所の情報をご家族や入院先の職員へ提供する等している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の言動や、本人の希望、家族から話を聞き、本人の思いや意向の把握に努めている。本人の思いや意向を個々の情報シートに随時書き込み、情報の共有をしている。	日頃接している中で繰り返し出る言葉や話題を「気づき」として情報シートに随時記入し、家族に確認するなどして思いや暮らし方の意向として受け止めている。職員同士で共有し、生活習慣に合わせながら実践に繋げるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	これまでの生活を家族や本人から聞き取っている。また日々の言動から、生活習慣等を把握に努めている。その内容を職員全員が把握し、個々の生活習慣に合わせて、支援を行なっている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	1日3回の申し送りの都度、様子や気づきを伝えている。また家族の状況や社会情勢(ニュース・天気)にも心身状態が影響する場合もあるので、本人の状況だけではなく周囲の状況に応じた対応をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のカンファレンスで随時検討している。本人の日々の暮らしや言動、家族の意見を反映し、介護計画書を作成している。	介護職員は全利用者の個別情報シートファイルを所持し、随時「気づき」の個所を記入し、毎月のカンファレンスに持ち寄り、モニタリングに反映させると共に、検討結果を最新の情報に更新している。介護計画は半年ごとの見直しを原則としているが、モニタリング結果や状態変化に応じ、家族参加のサービス担当者会議を経て現状に即した計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子やケアの実践を個別に記入。月に1回モニタリングを行なっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	受診時や自宅に帰宅等に職員送迎にて対応している。その時々ニーズに応じて、柔軟な支援が提供できるように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	体操教室、フラワーアレンジメント教室を実施している。小・中学生との交流あり。近所の他事業所の利用者が定期的に施設に来所し、将棋を行なっている。今年9月に開所10周年の予定し、地域の方々に感謝を伝える。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は家族対応で行っている。家族には普段のバイタル表を渡し、普段の様子を申し送りしている。必要に応じて職員と一緒に受診付添いを行う場合もある。受診後の結果や様子を家族と共有している。	かかりつけ医の受診が8名で、受診は原則家族対応でお願いしているが、家族の状況に応じて職員が対応するケースもある。受診時にはバイタルや日常の情報を提供し、受診結果は家族より口頭で連絡を受け、共有している。持病の悪化などに伴う往診対応などで主治医と事業所の緊密な連携が必要となっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎日健康チェックを行ない、併設事業所の看護師に常に連絡報告ができるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また早期退院ができるように病院関係者と情報交換を行なっている。退院時は退院時カンファレンスを開催し、退院後に不安なく元の生活に戻れるように情報交換を行なっている。入退院連携シートの活用をしている。	利用者が入院した際、安心して治療できるように、また早期退院ができるように病院関係者と情報交換を行なっている。退院時は退院時カンファレンスを開催し、退院後に不安なく元の生活に戻れるように情報交換を行なっている。入退院連携シートの活用をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取り加算は算定していないが、いずみの里での終末期ケアを希望される家族もおり、平成29年度は二人の入居者の看取りを行なった。家族の協力を得られ、協力医との連携を図り、安らかな最期を迎えた。看取りを行なう上で、家族との話し合いや看取り計画書作成を行ない、共通認識を持てるようにし看取りケアを行なった。	利用開始時に確認し、更に変化の都度、本人、家族に再確認している。主治医による終末期の診断がでたら、家族と相談を行い看取り介護計画書を作成し、最期まで負担の少ない快適な生活が送れるよう看取りケアに努めている。前年度は2名の看取りを行い家族からも感謝されている。看取り介護に関する評価報告書を全職員の関わりの中で作成する事で、反省と併せて職員の心のケアにも繋げている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AED研修を行う。AEDを設置し急変時に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	当施設から近隣の避難場所までの避難経路を全職員が把握できるよう努めている。非常連絡網に自治会長宅を加える。	今年2月、10月は消防立ち合いで通報、避難訓練を実施している。課題であった緊急連絡網13か所(職員、自治会長他)の確認や居室確認済みの付箋貼付などの対応が出来た。地域の避難場所「北小学校」までの経路を日頃の散歩コースに取り入れて危険個所の事前確認や、事業所独自の防災マップを作成するなどの提案が参加職員より得られている。次回の避難訓練は来年3月に夜間想定で行う予定をしている。	避難訓練の中で煙対応についての考慮が窺われません。排煙窓の機能確認や避難時の低姿勢など煙を意識した訓練の実施に期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	申し送り時、カンファレンス時等で、日頃より、具体的に声のかけ方、口調、介助の仕方を職員同士で注意し合ったり確認し合っている。	常に人生の先輩として敬い、受容と共感を持って接するよう努めている。全利用者の利用者情報のダイジェスト版(性格、拘り、気づいて欲しいことなど)の活用が定着し、日々更新しながら誇りやプライバシーを損ねないように、適宜適切な対応に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	外出、食事、入浴、日常の過ごし方等において、言葉だけではなく、表情等からも気持ちを受け止め、希望に合わせた対応が出来るようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴、食事、起床や就寝等ご本人の気持ちやペースに合わせ、臨機応変に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	化粧や髭剃りをされる方には、継続できるような環境を整えている。ホームにも月2回理容師が来るので希望や必要に応じて対応出来ている。なじみの理容室に行く方もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	皆が最も集う場所の近くで食事を作っている。一部の作業を手伝って頂いたり、味見をして頂くこともある。形態や内容の急な希望にも対応できるようにしている。	献立作成、調理を職員が交代で行い、食材は献立に沿ってそれぞれ地元業者に発注している。利用者専用の低床の調理台もあり、もやしのひげ取りや、インゲンの皮むきなど手伝う人もいる。刻みやお粥などの形態変更にも柔軟に対応している。職員は食が進むよう話しかけたり見守りながら一緒に食べている。継続している月1度の出前のメニュー選びは楽しみになっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分の摂取量をチェックし、不足している方に好みの飲み物を用意したり、ご本人の飲めるタイミングを見極め、いつでも用意するようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	それぞれの口腔内の状況や力に合わせて、毎食後口腔ケアが出来るよう支援している。口腔ケアスポンジや歯槽膿漏の薬を使用している方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	布パンツのみの方が1名、布パンツとパット使用の方が3名、紙パンツとパットの方が2名、紙パンツのみの方が3名いる。夜間のみ紙オムツを使用しているかたが2名いるが、ご本人の様子に合わせて、出来るだけトイレ誘導を行ない、トイレで用を足せるよう心掛けている。	大半の人が何らかの意思表示が可能であり、状態に応じて声掛け、見守り、誘導など使い分けている。特にパット装着の際や排泄の事後確認時には羞恥心に配慮している。5部屋が居室内トイレであり、転倒防止のため人感センサーを設置して対応している。夜間は睡眠優先で起きてきたら誘導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量の確認に留意し、ヤクルト、ヨーグルト等を飲んで頂いたり、好みの飲み物を常備し、いつでも飲めるようにしている。又、毎日全員で体操する機会をつくり、個別で歩行の機会をつくり、自然な排泄を心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	個々の気持ちや体調に合わせ臨機応変に入浴出来るようにしている。季節に合わせて菖蒲湯、ゆず湯も取り入れている。職員とマンツーマンでゆっくり入浴して頂けることで、良いコミュニケーションの場になっている。	週2回以上、午前中を原則としているが要望があれば柔軟に対応している。着脱が面倒で時には嫌がる人もいるが話題を変えながら浴室へ誘導している。職員と1対1の対応で本音が聴ける貴重な場にもなっている。看取りステージでも職員2人対応で慣れ親しんだ浴槽での入浴やシャワー浴、清拭などで対応し、清潔と安心を提供している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々のペースや、身体状況に合わせて休息をとって頂いている。昼夜逆転にならないよう注意し、個々のタイミングに合わせ、気持ち良く寝起き出来る様対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員全員が薬の内容を理解して服薬の支援している。薬の変更があった時は必ず記録と口頭で伝達し合っている。体調の変化があれば、書面と口頭でご家族や医療関係者に伝え相談することもある。誤薬を防ぐ為に複数回確認するしくみを作っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	昔ながらの趣味である将棋やピアノ、絵描き等できる環境を整えている。園芸や農業の経験者が多いことから、野菜作りに力を入れることにより、見に行くことや収穫を楽しめるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日頃、体調や天候を見ながら、中庭に出たり、散歩に出掛け、外気に触れられるよう努めている。季節に合わせ、花を見に行ったり、地域のイベントに参加してもらったりする他、個別ケアとして1対1で希望の場所へ外出する機会も作っている。	日頃は車の少ない近所の路地を散歩コースにしている。体調や天候を見ながら園遊会と称して中庭やテラスでのお茶会やバーベキューで、外気浴に努めている。個別ケアとして希望を聴いて、遠足と称して家族と一緒に掛ける企画(足利フラワーパークなど)は、家族からも一緒に過ごせる貴重な時間として好評を得ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	事務所金庫にて管理。3ヶ月毎に領収書、収支報告書をご家族にお渡しし報告している。ご自分で数千円程度所持されている方は2名いる。外出時にアンパンを買ってご自分で支払う方や地域の祭りに出掛け、好きな物を買うなどされている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご希望に合わせ、対応している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご利用者の作品をより美しく展示できるよう努めている。毎日次亜塩素酸を使用し清掃している。季節の花は絶やさず、装飾等を工夫して、明るく落ち着いた空間作りに努めている。	ワンフロアの広いリビングダイニングには装飾品は少なめにして季節の花を置くなど落ち着いた雰囲気になっている。廊下には利用者の作品や行事写真などを掲示し、生活感を演出している。車椅子利用者(4名)に対して、テーブルなどは動線に配慮して配置されており、居心地よく過ごせるよう工夫されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	2ヶ所コタツのスペースを設けている。それぞれが落ち着ける場所で過ごされている。職員は思いを察知しながらそれぞれにあった生活の仕方を支援している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族、ご本人と相談しながら家族写真を飾ったり、使い慣れた家具やベッド等自由に持ち込み使用して頂いている。使いやすい配置にし、出来るだけ自立できるよう工夫している。	全室洋室で洗面台、クローゼットが備え付けで、内5室はトイレ付でゆったりとした広さが確保されている。使い慣れたベッドや家具、テーブル、椅子、衣装ケースなど持ち込んでいる。車椅子利用者が多く、夜間起床時のふらつき転倒に配慮し、個々人の状態に合わせてクッションマットや補助具の置き場所を工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ベッドの高さ、テーブル、タンス、椅子等の位置を工夫し自立した生活が送れるようにしている。転倒のリスクのある方の居室にはクッションマットを敷き、又、動かれた時には職員側だけ音が鳴るセンサーを使用。その際には同意を得ている。		